

AMIRA DALI

アミール・ダリ ラブ・グリーン・ネパール代表

## 緑を増やし、人を育てて 母国の将来に“種を蒔く”

この国の役に立ちたい——。南アジアの国ネパールでNGO「ラブ・グリーン・ネパール」を立ち上げ、植樹活動に取り組みアミール・ダリさん。森林破壊が進む母国の山河に緑を増やそうと、三十年以上にわたって植え続けた木々は百五十万本を超える。さらに、農村部の開発や女子教育など多岐にわたる分野でアクティブに活動を繰り広げている。母国のさまざまな課題に力を注ぐアミールさんの人となり迫ろうと、ネパールへ飛んだ。



### 【アミール・ダリ】

1955年、カトマンズ生まれ。国立トリバン大学大学院修了後、天理大学専科日本語科（当時）へ。上智大学大学院で国際経営学を学んだ後、海外技術者研修協会（AOTS）の企業研修を経て帰国。その後、日本の政府開発援助（ODA）を扱う日系貿易会社の現地マネージャーとして活躍。1991年、NGO「ラブ・グリーン・ネパール」を設立。2023年に「令和5年 春の外国人叙勲」の「旭日双光章」を受章。天理教給郷教会教人。ネパール人の夫ドウルゲッシュさんとともに、家族ぐるみで信仰している。

日本から南西へ五百キロ、中国とインドに囲まれた南アジアの国ネパール。『世界の屋根』ヒマラヤ山脈を擁し、登山の玄関口として知られるこの国は多民族国家だが、国民の多くはヒンドゥー教を信仰している。

一方で、特に開発の遅れている国として国連が規定する「後発開発途上国」の一つに数えられる。地域や民族、教育、性別など、さまざまな格差がその原因といわれる。

六月五日、国連が「世界環境デー」と定められたこの日、アミールさんは首都カトマンズから三十キロ南東にあるドウリケル市にいた。彼女が主宰するラブ・グリーン・ネパール（以下LGN）では毎年、「世界環境デー」に合わせて植樹イベントを開催している。今年の会場は、緑豊かな丘陵地帯の一角にあるドウリケル病院。ここには、市内のみならず周辺地域からも数多くの患者が訪れるほか、大学病院として医学生の教育も担っている。

「病院を緑あふれる憩いの場にしたい」との院長の思いから、LGNの協力のもと数年来、病院周辺に延べ五百本の苗木を植えてきた。

晴れたる空のもと、病院前の広場にLGNのスタッフをはじめ病院関係者、学生など約六十人が集まった。植樹に先立ち行われた

セレモニーで、アミールさんが学生たちにメッセージを送った。

「皆さん、ご承知のように、病院は患者さんを治療するところです。そこに緑が増えると、さらに多くの癒やしを与える憩いの場になります。でも、そのためには、ただ苗を植えるだけでなく、ちゃんと育てる必要があります。より良い病院を目指して、今日植える苗を、愛情をもって育ててくださいね」

用意した苗木は、イチヨウやローズアップルなど約百本。セレモニーの後、学生たちは病院周辺の空き地に一本ずつ丁寧に植えていった。

優しいまなざしで学生たちを見つめながら、アミールさんは呟いた。

「私のメッセージ、どこまで伝わったかな」

「ネパールに緑を増やそう、  
緑を愛そう」

植樹イベントを終えると、ドウリケル市から車で一時間ほどのところにあるパンチカール市へ向かった。ここには、アミールさんが一九九一年にLGNを立ち上げた後、初めて設けた事務所がある。到着したとき、ちょうどスタッフがトラックに苗を積み込んでいる



近年、力を入れているコーヒー苗の栽培。LGNの支援で作られたネパールコーヒーはブランド化され、日本の国会議事堂でも愛飲されているという



植樹イベントで学生にあいさつをするアミーラさん



ドゥリケル病院で行われた「世界環境デー」植樹イベント。セレモニーには市長も訪れた（ドゥリケル市）

「日本に着いた翌日、松本先生が日本語の新聞を読んでおられたんです。それがとても羨ましくて、たどたどしい日本語で『いつになったら、私は新聞を読めるようになりますか?』と聞いたのです。そしたら先生は、びっくりなさって、『そうだね。アミーラが一生懸命に勉強すれば、一年半くらいで読めるようになるかもしれないね。でも焦らなくていいよ』って。日本語の難しさを何も分かっていたいなかったんですね」

師の励ましを胸に、本来なら一年半のコースを一年で修了。その後は、松本氏が会長を務める天理教谿郷分教会に住み込みながら、

い込んだ。発端は、ネパール国王と親交があった聖心女子大学教授の松本滋氏（天理教谿郷分教会会長へいずれも当時）が、将来のネパールの発展に寄与する若い人材を日本へ招きたいと考えたことにある。交流があった大向氏に松本氏が相談したところ、名前が挙がったのがアミーラさんだった。一九七六年、初来日。松本氏の勧めで、天理大学選科日本語科（当時）で日本語を学んだ。

当時のことをアミーラさんに尋ねると、「私、バカだったの」と笑みを浮かべながら松本氏とのエピソードを語った。

「日本に着いた翌日、松本先生が日本語の新聞を読んでおられたんです。それがとても羨ましくて、たどたどしい日本語で『いつになったら、私は新聞を読めるようになりますか?』と聞いたのです。そしたら先生は、びっくりなさって、『そうだね。アミーラが一生懸命に勉強すれば、一年半くらいで読めるようになるかもしれないね。でも焦らなくていいよ』って。日本語の難しさを何も分かっていたいなかったんですね」

「あれはコーヒーの苗。ここは植樹用の苗木を育てる農園なんです。育てた苗を、農家や植樹を希望する団体に出荷しています。今回はコーヒーの苗、一万本の注文が入ったみたいですよ」

ここでは日々、農業専門のスタッフが泊まり込みで苗を管理している。このほか、農家への農業トレーニングや周辺地域に住む女性や子供たちへの教育、日本語教室など、さまざまな取り組みも行っている。

「いまでこそ、いろいろな活動をしています。最初は、とにかく木を植えていこうという、単純な考えでスタートしました」

アミーラさんは一九五五年、カトマンズに生まれた。教育熱心な両親のもとで育ち、幼少から読書好きな少女だった。学校では飛び級に飛び級を重ね、十二歳で高校を卒業。以後、国立トリバン大学で経済学を専攻する傍ら、同大の日本語教師を務めていた大向良治・天理教ネパール連絡所長（当時）のもとで日本語を学んだ。

同大学院まで進んだのち、いったんは就職したが、大向氏を通じて日本留学の話が舞

なぜネパールの川は洪水ばかりなんだろう。  
なぜネパールはハゲ山ばかりなんだろう。  
そんなことを考えるなかで、  
とにかく木を植えようと思ったんです。



上智大学大学院で経営学を学び、修士号を取得した。以後、海外技術者研修会(AOTS)の研修生として都内の企業でソフトウェアの開発技術を習得。一九八二年の春、六年間の留学生生活を終えた。

帰国後は日本商社のカトマンズ事務所に就職し、政府開発援助(ODA)や企業のプロジェクト立案などに携わった。こうしたなか見えてきたのは、森林破壊が進むネパールの現状だった。

経済的に貧しい農村部の家庭では、煮炊きや暖房などに使う燃料の大部分を薪に頼っていた。そのため無秩序な森林伐採が行われ、それが原因で山崩れや洪水が頻繁に発生していた。そんな祖国の姿を目の当たりにしたアミーラさんの頭をよぎったのは、日本で見た緑豊かな山々や、清らかに流れる川の情景だったという。

「日本の川はあんなに行儀よく流れていたのに、なぜネパールの川は洪水ばかりなんだろう。なぜネパールはハゲ山ばかりなんだろう。そんなことを考えるなかで、とにかく木を植えようと思ったんです」

帰国から九年後の一九九一年、NGO「ラブ・グリーン・ネパール」を設立。「ネパー

ルに緑を増やそう、緑を愛そう」との思いを込めて命名した。

### 最初は、一本の木から

「見て！ 小さなマンゴーの実がなってる。かわいいね」

アミーラさんは、童女のように無邪気な声を上げながら幼いマンゴーの実を指さした。農園にはビニールハウスや苗床が並び、コーヒー以外にサクラやイチヨウなどの植樹用をはじめ、野菜や果物など多種多様な苗が葉を茂らせている。

「緑を増やそう」との理想を掲げ、設立したLGNだったが、当初は困難を極めた。「現地の人々に活動の意義をなかなか理解してもらえなかったのです。村人たちは『木が無くなったら、別の場所から切ってきたらいい』という感覚で、木を植える」という発想がありませんでした」

アミーラさんたちは、村人一人ひとりの要望を地道に聞き取りながら、理解と協力を求めた。そのうえで専門家と相談を重ねて「3F」計画を立案。農業を営む村人のために、成長が早く燃料となる木(Forest)、

家畜の餌となる木(Fodder)、果物など農業所得が得られる木(Fruit)の三種をセットにして山への植樹活動を展開した。次第に村人の協力が得られるようになり、やがて大規模な植樹事業へと発展していった。

アミーラさんのアイデアはさらに膨らむ。主要資源である薪の代替燃料となるバイオガス事業に着手したのだ。家畜の糞尿を発酵させ、発生するメタンガスを利用したバイオガスプラントを考案、農村地域への普及を促した。この事業は、環境保全はもちろん、それまで家庭内で薪集めの役割を担っていた女性の労働環境の改善や、薪を燃やした煙による健康被害の軽減にもつながっている。

アミーラさんたちの活動は、これに留まらない。農村地域では従来、大量の化学肥料や殺虫剤が使用されていた。その影響もあり、村に難病が頻発。畑の土壌もやせ細っていた。こうした状況を踏まえ、LGNは有機農法の普及事業を始めた。そのデモファームを見せてもらえるというので、パンチカール市の事務所を出発した。

山道の凸凹に揺られながら、進む先に見えるきたのは、山を切り拓いた村アナイコット。斜面には帯状の段々畑が連なっている。車を



パンチカールの事務所では、農園のほかに、パソコン教室や日本語教室、女性の自立支援教室などの取り組みを進めている(パンチカール市)



アナイコット村にあるLGNのデモファーム。農業のほかに牛などの畜産も行われ、自立した農業運営を実現している(パンチカール市)

降り、畑の脇のあぜ道を歩いていくと、土壁で作られた古民家が見えてきた。その周囲にトウモロコシやカボチャなどの野菜が育つ。よく見ると、苗木に黄色いシート状のものがぶら下がっている。

「ここが、LGNが管理しているデモファームです。狭い土地でも十分に作物が取れることを実証し、農家の人たちに実際に見てもらいながら研修を行っています。あの黄色いシートは虫取りシート。あのようなものを使って、可能な限り有機農法による栽培を目指しています」

この農園で育てた野菜を使った、ダルバートという名のネパール料理をご馳走になった。金属製の大皿に、ご飯と野菜カレーと付け合わせ、別の椀にはダルと呼ばれる豆のカレースープが入っている。新鮮な野菜は甘みが強く、スパイスが一層旨味を引き立てている。

「ここには日本企業のインターンとして、日本からの大学生が来ることもあります。みんな『おいしい、おいしい』と言って、この野菜を食べてくれますよ」

さらにLGNは、灌漑用水施設の整備にも着手。乾季と雨季があるネパールでは、雨が降らない乾季に作物を育てることは難しいが、

この灌漑設備ができたことで、年間を通じて作物の栽培が可能になったという。

ゴータム・パールバティさんはLGNの研修を受け、灌漑用水を導入した農家の一人。以前はトウモロコシのみ栽培していたが、導入後はジャガイモやタマネギなども手がけるように。いまでは年間一万キロものジャガイモを収穫しているという。「LGNのおかげで収入が増え、新しい家を建てることができました。この地域の人々にとって、LGNは神様のような存在です」と誇らしげに話す。

ゴータムさんのように、アナイコット村でLGNの灌漑用水を使用している農家は三百世帯。研修を受けた農家は一千二百世帯に及



地べたに座り、右手を使って食べるのが昔ながらのネパールの食事スタイル



ゴータムさん(左)は、灌漑用水の整備に当たってLGNに協力した村人の一人。LGNの事業は、現地の人の協力を得ながら進められる



私を育ててくれたのは日本……。だから、一人でも多くのネパール人に日本のことを理解してほしい。

種は上手に育てると、たくさん種が採れます。

ネパールの未来のために「種」を育てて

蒔き続けたいといけない。

それが神様から与えられた、私の役割だと思っています。

ぶ。

ゴータムさんの話を聞いていたアミーラさんは、「最初は、一本の木を植えようというところから始まりましたが、こうして村人が喜んでいる姿を見ることができて、夢のようにうれしいですね」と目を細めた。

### 受け継がれる精神

子供たちのにぎやかな声が聞こえてきた。ここはアナイコット村にある小学校。校舎はLGNの支援によって建てられたもの。アミーラさんが教室に入ると、一人の女の子が立ち上がって椅子を取りに行った。

「わあ、椅子を持ってきてくれるの。優しいねえ！」

アミーラさんたちが植樹や農業支援とともに力を入れてきたのが教育支援だ。LGN設立当初、「植樹への理解を広めるには、大人に納得してもらいよりも、子供たちに理解してもらったほうが早いのでは」と考え、学校での植樹活動を始めた。そのなかで見えてきたのは、校舎も机も椅子もなく、野外で地面に敷物をして勉強する子供たちの姿だった。「その光景を見て、とても悔しかったんです。



小学校では緑の大切さも伝えている。子供たちは近く、サクラを植える予定だという

同じネパール人でありながら、私は大学院や日本にまで行って勉強させてもらったのに、この子供たちは基本教育すらきちんと受けられていない。私がどれだけ恵まれていたのかを痛感しました」

アミーラさんたちは校舎建設のプロジェクトをスタート。日本の支援団体から援助を受けながら、各地に校舎を建てていった。その数、三十年で五十を超え。

子供たちとの会話を終え、アミーラさんが教室から出てきた。なんだか深刻な表情をしている。訳を尋ねると、「あの子たちは小学三年生なんです、年齢の割に体が小さいんです。聞けば、きちんとご飯を食べられて



アミーラさんはLGNのほか二つの会社を経営。一つの会社では、バイオテクノロジーを駆使して植物を培養している



アミーラさんを親のように慕うヨソーダさん(左)。子供たちには「目標を持つことの大切さ」を伝えている



LGNカトマンズ事務所のスタッフたち。「30年続いたのはスタッフのおかげ」とアミーラさん



アミーラさんの昼食はいつも、ドゥルガさん(左)お手製のパン



ネパールの政治、文化、経済の中心地である首都カトマンズ。人口170万人が住むこの大都市は、「神々の住む街」と称される。市内の至るところに寺院があり、人々が祈りを捧げる。ユネスコの世界遺産にも登録されている旧王宮広場は、赤レンガで建てられた歴史的建造物が立ち並ぶ、人気の観光地だ。また、市内には天理教ネパール連絡所があり、ネパール人の信者が集う。



いないようなんです。きっと栄養失調で成長が遅れているのだと思います。なんとかしなければ……」。

その場でアミーラさんは、校長先生と相談を始めた。数分後、「近く、保護者を対象に栄養管理の講習をすること、そして年に一度子供たちの健康診断をするシステム作りをしようという話になりました」。

現地で見つかった問題に対してすぐに解決策を提示し、新たな企画を事業化する。そのスピード感に驚かされた。LGNが村人から「神様のような存在だ」と慕われる理由を垣間見る思いがした。

LGNの教育事業のもう一つの柱が、女性支援だ。LGN設立当時、貧しい家庭の多かった農村部では、男子を優先的に学校へ通わせ、「やがて結婚する女子にまで教育を受けさせる必要はない」と考える人が少なくなかった。そこでLGNでは、二〇〇〇年に女子奨学制度を設置。卒業から二年間、母校で教員実習をすることを条件に、経済的に恵まれない女子への奨学金給付を始めた。

さらに、学校卒業後も社会で活躍するスキルを習得させるために、奨学生を対象とする独自のトレーニング・プログラムを実施。

「自信をつけさせる」ことを目的に、自己PRの練習や模擬討論、パソコン技術の研修などを行っている。

元奨学生の一人、ヨソーダ・ライさんは現在、子育てをしながらLGNのパソコン教室で指導者として働いている。彼女は「私ほど幸せな人間はいない」と涙を流した。「LGNのおかげで教育を受けることができ、人間的にも成長させてもらえました。そのLGNで働くことができ、本当に幸せなんです」

現在、カトマンズ市内でパン屋を営むドゥルガ・カヤスタさんは十年前、LGNの支援のもと、日本の福島県でパン作りの研修を受けたという。

「慣れない土地で右も左も分からないなか、朝から晩まで立ちっぱなしの研修はとても大変でした。でも、あの経験があったからこそいまがあります。それもすべてLGNのおかげ。私にとってLGNは、家族のように大切な存在なんです」と、感謝の思いを話す。

元奨学生たちにインタビューするなかで、全員が口を揃えた言葉がある。それは「人生の目標を持つ大切さを教えてもらった」ということ。農村部の少数民族出身の彼女たちにとって、女性は学校を出ても、結婚して家庭



に入るのが当たり前。「自分たちは何もできない」「社会に出ても成功しない」と思い込んできた。アミールさんたちは、そんな彼女たちに「人生の目標を持つ大切さ」を教え、社会へ旅立たせてきたのだ。この二十間で巣立った奨学生は五百人を数える。

これまで元奨学生の心の内を聞いたことがなかったというアミールさん。彼女たちから直に打ち明けられ、心からうれしそうな表情でこう話す。

「素晴らしい人間に育ってくれて感動しています。彼女たちにはLGNの精神が血液のように流れていると思います。社会へ出た人、家庭で主婦をしている人など、立場や役割は違いますが、それぞれの務めをしっかり全うして、ネパールのために貢献してほしいですね」

### ネパールと日本の懸け橋に

LGNの設立から三十年余り。植樹、農業支援、女子教育の支援と、それこそ八面六臂の活躍を見せるアミールさんだが、一時は事業の存続が危ぶまれることもあった。

二〇〇二年、ネパール国内の政情不安が続



カトマンズ事務所には、LGNやアミールさんの功績を称えた賞状が所狭しと並んでいる

くなか、反政府組織の襲撃によりパンチカール市の事務所が全焼するという事態が発生した。

「事務所が燃えているのを見たときは、涙が出ました」

仕方なく、アミールさんたちは事務所を引き揚げ、活動の継続も諦めかけた。ところが、ある日、村人から活動の再開を求める声がかかる。その熱意を受け、あらためて活動を立ち上げ、現在に至る。

数々の困難ななかも、常に前を向くアミールさん。その原動力は、日本留学時代の恩師・松本滋氏から掛けられた言葉だ。

「将来、ネパールと日本の懸け橋になって、幅広く活躍するんだよ。アミールは私の宝だ」

昨年、アミールさんは「令和五年 春の外

国人叙勲」の「旭日双光章」を受章。これは、AOTSの元研修生による非政府・非営利団体「ネパールAOTS同窓会」の会長（現・顧問）として、日本とネパールの友好関係や相互理解の促進に対する貢献を評価されたもの。加えて、ネパール人への支援活動やネパール人女性の日本への研修派遣、日本の大学からのインターン受け入れなど、日本とネパールの人的交流への貢献も高く評価されている。

「私を育ててくれたのは日本です。だから、一人でも多くのネパール人に日本のことを理解してほしいと願っています。松本先生は、私という「一粒の種」をネパールに蒔いてくださいました。種は上手に育てると、たくさんのが採れます。だから私は、松本先生の期待に応えるためにも、ネパールの未来のために「種」を育てて時き続けないといけない。それが神様から与えられた、私の役割だと思っています」

母国のため、そして自らを育ててくれた日本のために、目の前にある難渋な課題に一つひとつ向き合っていくアミールさん。彼女が植えた「種」たちは、将来のネパールを支える大木に育つに違いない。

すきっとした気分で暮らすために

# skitto

すきっと

Vol. **41**

定価880円

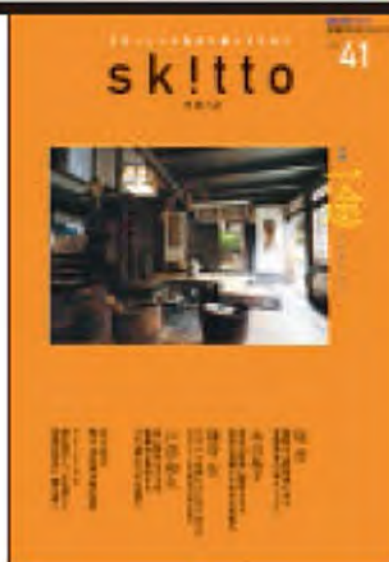
【本体800円】

A4判／オールカラー  
112ページ

**9月1日発売!!**

※道友社の販売所では  
8月25日から販売します

特集



さまざまな分野の  
第一線で活躍する人々に  
とことんインタビュー。  
「仕事」「人生」「ころ」に  
迫ります!

## 道友社の新刊書

お近くの書店か道友社へ直接お申し込みください。

注文受付 ☎0743(63)4713

Webストア <https://doyusha.net>



# 途

i  
c  
h  
i  
z  
u

**原晋** 青山学院大学陸上競技部監督

根幹は人間教育にあり  
常勝青学の「原メソッド」

**永山祐子** 建築家

目先の評価に翻弄されず  
未来を見据えた大きな仕事を

**麴谷宏** デザイナー

デザインは美しさだけではない  
日本デザイン界の異端児が語る仕事術

**戸部和久** 歌舞伎脚本家／演出家

時に敵役も主人公。  
歌舞伎が表現する  
「より晴れやかな世界」



連載

■ **ヒューマン**

陶工・

河井寛次郎の世界

河井敏孝 河井寛次郎記念館館長

■ **この道**

**アミーラ・ダリ**

ラブ・グリーン・ネパール代表

緑を増やし、人を育てて

母国の将来に、種を蒔く、

■ **skitto対談**

**角居勝彦+手嶋龍一**

奥能登に

「引退競走馬の故郷」を

※このほかエッセー、コラムなども充実

■ **悠々まほろば散歩**

**片山恭一** 作家

写真・小平尚典

■ **現代いまを紐解く**

**手嶋龍一**

外交ジャーナリスト／作家

■ **忘れられない詞** ことば

**中江有里** 女優／作家

■ **戦国よもやま草子**

**天野忠幸**

歴史学者／天理大学教授

■ **毎日がスケッチ日和**

**西菌和泉** 画家



表紙=「ヒューマン」から